

平成22年6月11日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520639

研究課題名（和文） フランス近現代の都市空間と住民たち
—パリ郊外シュレーヌの田園都市を中心に—研究課題名（英文） Urban space and its population in the 20th-century France
— On the garden-city of Suresnes in the suburbs of Paris—

研究代表者

中野 隆生（NAKANO TAKAO）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：90189001

研究成果の概要（和文）：

シュレーヌ田園都市の第1次事業区画にかんする論考（「シュレーヌ田園都市の居住空間と住民にかんする一考察—1926～46年のパリ郊外—」）を公表し、この論考を前提としながら、田園都市の建設過程や住民にかんする調査を進めた。その結果、この田園都市が、第1次事業（1921年の計画）から第8次事業（1949年の計画）まで、8度にわたって住棟・住戸の建設が計画され建設されたことを明らかにした。また、個々の住棟や住戸についても空間のあり方を確認した。

また、シュレーヌ田園都市に生れた社会の全体像をとらえる目的のもと、すでに検討した第1次事業区画との比較をおこなう対象として、第4次事業として建設された戸建て住宅30戸余りと高齢者向け施設、および田園都市の中心部と想定される第5次事業区なかで祭事場（のちの劇場）を取り囲んで立つ集合住宅6棟を選ぶこととし、当該区画の住棟・住戸の空間を把握するとともに、そこに住んだ人びとのデータを、1926・31・36・46年の国勢調査原簿から取り出した。現在、そのデータをコンピュータに入力中であり、住民分析のとりまとめまでにはもう少し時間が必要である。また、こうした作業のなかで、シュレーヌ田園都市が周囲の社会（シュレーヌ市・パリ地方・フランスなど）といかなる関係を切り結んでいたのかを知る必要を認識したが、そこでは新たな史料の可能性をさぐる必要があった。

居住空間に視座をすえた都市史研究の方法的発展を求め、まず、これまでの研究を振り返って近現代フランスにおける居住空間の変遷を論じた（「フランス近現代における居住空間の変遷」）。他方、書評のなかで、住宅史への視座や方法にかんする見解を表明した（「書評：北村昌史著『ドイツ住宅改革運動—19世紀の都市化と市民社会—』」）。さらに、近現代の都市史・住宅史ではヨーロッパ全体を視野にいれた歴史的展望がはかられていることを踏まえ、また、都市・住宅にかんする学際的論議の必要性を痛感して、イギリス・フランス・ドイツを専門にする歴史研究者を中心にした共同研究を立ち上げ、国際的・学際的に議論を活発化することとした。これまた本研究計画を通じて、筆者が到達した結論の一つである。

研究成果の概要（英文）：

First, I published an article on the first block of the garden-city of Suresnes (“A consideration about the living space and its people in the garden-city of Suresnes : In the suburbs of Paris, 1926-1946”), and, based on this article, I tried to push ahead my researches into the construction of the garden-city and into its population. As a result, it became clear for me that this garden-city was planned and constructed in eight steps, from the first project in 1921 to the eighth one in 1949. And I confirmed also how is organized the interior space of its apartment buildings and its two-story houses.

Secondly, I selected more than 30 houses of two-stories and a home for the elderly, which were built according to the fourth project, and 6 apartment houses, constructed as the fifth step, around the festival hall (actual theater), and this in order to compare

with the block of the first operation and to make an image of the whole society born in this garden city. Then, I gathered data of the people living in these selected dwellings from the nominative lists (listes nominatives) of the census (recensements) carried out in 1926, 1931, 1936 and 1946 ; inputting now information into my computer, I need a little more time to finish analyses of the population in these blocks. Doing on such researches, I began to think it necessary to see what relationship the garden-city formed with the outside urban space (city of Suresnes, region of Paris, France and so on). Now, this viewpoint require me new kinds of documents.

Thirdly, basing on my own works, I gave a general view on the living space and its evolution in France during the modern and contemporary period (“Evolution of the living space in the modern and contemporary France”) in search for the methodological development of urban historical studies. On the other hand, I expressed some opinions about historical studies of the housing problems in a review on *Housing reform movement in Germany : Urbanization and civil society in 19th-century*, written by KITAYAMA Masafumi. Knowing well that urban historians in West-European countries are now trying to form the urban history of the Europe as a whole, and thinking it indispensable to have interdisciplinary arguments about the urban society and the housing problems, I strengthened my determination to organize a research group especially with historians specialized in Great-Britain, France and Germany, and to animate international and interdisciplinary discussions on the contemporary urban history of the Europe. This is also a result of my research project.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史、社会史、都市計画・建築計画、住宅、都市空間

1. 研究開始当初の背景

19～20 世紀フランスの都市・住宅にかんする研究は、歴史学をはじめ地理学・社会学・建築学・都市計画学など、様々な学問領域でおこなわれてきた。そうしたなかで、20 世紀前半、第一次世界大戦前後から大都市が空間的に拡大して都市社会が大きく変貌する事実の重要性が指摘されるとともに、首都パリをおもな対象として、この現象に多面的な検討が加えられてきた。なかでもパリ周辺の郊外に生じた諸現象には、多くの歴史家の目がそそがれてきた (Annie Fourcault (dir.), *Un siècle de banlieue parisienne (1859-1964)*, Paris, 1988 ; Annie Fourcault

et al., *Paris/banlieue. Conflits et solidarités*, s.l., 2007 などを参照)。

こうした現代フランス都市史研究の現状を踏まえながら、そして筆者がかつておこなった 20 世紀はじめにパリ市内に誕生した集合住宅と住民たちにかんする実証的研究の成果 (中野隆生『プラーグ街の住民たち—フランス近代の住宅・民衆・国家—』、山川出版社 1999) を前提としつつ、「都市を居住空間から照射する」という視座と方法を、パリ西郊の小都市シュレーヌに建設された田園都市の居住空間と住民実態の解明に適用しようと考えたのが、本研究のそもそもの出発点であった。この研究対象やテーマの選択に

は、パリ郊外研究の厚い蓄積、シュレーヌ田園都市をめぐる資料の豊富さ、パリ市内にかんする自らの研究成果と比較する可能性といった、配慮や判断が働いていたことはもちろんである。

こうして、19～20世紀のフランスやパリ地方の歴史的動向を意識しながら、1920～50年代に建設されたシュレーヌ田園都市について、建設者の思想・居住空間のあり方・住民の実態という三つの角度から、徐々に実証的調査を進めてきた(たとえば、中野隆生「膨脹するパリとアンリ・セリエー両大戦間期の都市空間をめぐる一」・『メトロポリタン史学』創刊号・2005)。本研究は、筆者のこうした研究をさらに前進させ、20世紀フランスの都市・住宅・住民そして社会を照射しようと着想された。

2. 研究の目的

第一次世界大戦前後からの首都パリとその地方にかんする都市史的研究を展望すれば、パリの郊外には劣悪な居住環境が民間業者の手で形成され社会問題化していたこと、これに象徴されるパリ地方のかかえる都市的諸問題の解決という固有の文脈においてイギリスに生れた田園都市の考え方が導入されたこと、その延長線上でパリ周辺にセーヌ県公社によって田園都市が建設されたこと、シュレーヌ田園都市はこれら田園都市のなかで代表的な建設例と認めうることなどは、すでに指摘されている。個別の田園都市の形成にかんする研究は決して多くはないが、そのなかでシュレーヌ田園都市をめぐるのは建築学・建築史からの接近もあって一定の成果が生まれている。行政・財政の面から田園都市の形成に迫った研究もほしいが、現在のところ、個別の田園都市にそくするその種の研究は存在しないようである。

ところで、田園都市に生きた住民を明らかにした社会史的研究はきわめて少ないが、そうしたなかで、シュレーヌ田園都市にかんしては、住民(あるいは住民生活)の職業的・社会的分析など、比較的解明が進んでいる(Adeline Loiseleux, “La ronde du quartier : quatre-vingts ans de paricours de vies dans la cité-jardins de Suresnes”, Alexandre Delarge et al. (dir.), *Ville mobile*, Paris, 2003 など)。近現代フランス史研究全体を見渡しても、居住空間を意識しながら、住民を正面から検討した試みはほとんどなく、わずかにリヨンのエタ＝ジュニ地区の低廉住宅にかんする研究が目につく程度である(Claire Berthet, *Contirbution à une histoire du logement social en France au XIXe siècle*, Paris, 1997)。ここに、先にあげた筆者自身によるパリ第13区プラーグ街低

廉住宅の住民分析を加えてもよからう。

以上のようなパリ地方の田園都市にかんする研究の現状をおさえ、そのうえで、以下のような点に焦点をしばって本研究を進めることとした。

①パリ地方に導入された田園都市をめぐる理念や思想を、セーヌ県公社をリードしたアンリ・セリエにそくしながら、歴史的状況のなかに位置づけつつ考察を加える。

②シュレーヌ田園都市の空間の形成(建築的・都市計画的な側面)を第一次史料によりながら追跡する。全体の建設過程を確定するとともに、住棟配置・共同施設・住戸タイプなどとらえる。

③1920～50年代に誕生したシュレーヌ田園都市の住民実態を、1926・31・36・46年の国勢調査の原簿をもちいて把握し、その年齢構成・出生地分布・世帯構成・職業的社会的構成・勤務地・勤務先などを解明する。また、住戸タイプなど居住空間の特徴と住民の属性のあいだの相関関係を検討する。

④本研究を通じて、田園都市の住民たちのアイデンティティや彼らにたいする外部からの視線を解明すべき中心的課題とするが、これを達成するには、①～③で言及した史料では十分ではないと思われる。そこで、新たな史料の可能性をさぐり、都市や住宅や住民に立ち向かう視座や方法を模索する。

以上の作業を推進するなかで、パリとその地方における都市社会のあり方へ、可能な限り接近しようと考えたのである。

3. 研究の方法

筆者の考えによれば、近現代都市の空間は、住居、街区ないし地区(カルティエ)、都市域ないし都市的広がりといった位相の異なる空間が重層的かつ複合的にからみあって成立している。本研究がとくに焦点を合わせたのは、このうち、シュレーヌ田園都市という街区ないし地区、および住居であるが、都市域ないし都市的広がりについても目配りを忘れないように心掛けることとした。上記した重点的な研究の目的(①～④)のそれぞれについて、研究にとりかかるさいに考えていた方法を述べれば、以下のとおりである。

①パリ地方の田園都市建設を担ったセーヌ県低廉住宅公社の理事長にして長いあいだシュレーヌ市長でもあったアンリ・セリエの住宅＝都市問題にかんする理念と思想の検討をおこない、住居(世帯＝家族)、街区ないし地区(シュレーヌ田園都市)、都市域ないし都市的広がり(シュレーヌ市そしてセーヌ県)という空間のそれぞれをめぐる、セリエの認識・構想がどうなっていたかをとらえる。なお、「都市域ないし都市的広がり」としてあげたシュレーヌ市やセーヌ県は行

政的枠組みであり、必ずしも現実に都市化＝市街地化しているとはいえないが、この点には十分な注意を払うことにしていた。こうしたセリエの理念や思想にかかわる検討は、セリエ自身の著作をベースとしておこなうしかなく、具体的には、セリエの著作を収集し渉猟して、歴史的文脈になかに位置付けて理解するというオーソドックスな歴史研究の方法をとることとした。

②シュレーヌ田園都市の建設は、第二次世界大戦をはさんで、30年以上にわたってつづいたが、建築的・都市計画的なレベルでの建設過程は、シュレーヌ市立文書館などに所蔵されている建築家の手になる第一次資料（田園都市全体の計画図・住戸の設計図・建築家の提案書など報告書、写真、その他）をもとに復元してゆくことにしていた。

本研究を開始した時点で、シュレーヌ田園都市の第1次事業（第1次建設区画）にかんしてはこれらの調査をほぼ終了していたため、それを踏まえて、第2次事業以降の動きを明らかにし、シュレーヌ田園都市全体の建設過程を確定することが優先的に実施すべき作業であると考えていた。この点にかんしてはいくつかの研究成果があり、筆者もこれらを参照していたが、第一次資料とつきあわせてみると無視しがたい矛盾が散見され、自分自身での調査・把握が不可欠であると判断していた。また、この建設段階を確定するなかで、住棟ごとの住所を手掛かりとすれば、どこにどういった住棟・住戸そして共同設備ができたかを、田園都市の全体にわたって掌握することができると考えていた。

③本研究は、これら住棟・住戸の知見を、そこに居を定めた住民の情報とつきあわせようというところに重点をおいていた。ところで、セーヌ県低廉住宅公社の資料が一般公開されていない現状では、住民にかんする情報は、国勢調査原簿から得ることにならざるをえなかった。また、本研究に着手した時点で、第1次事業地区の住民にかんする調査・分析はほぼ完了していたが、同様な調査・分析を、最終的には1万人以上の人口をかかえるシュレーヌ田園都市の全体に広げるのか、その一部に限定しておこなうのかは、いまだ決断ができていなかった。

④全体として田園都市住民のアイデンティティなどに迫るために利用できる史料については、現地の専門家と交流し、また現地の文書館などで仕事を進めながら、探索する計画にしていた。また、住宅に視座をすえて都市を考察するという本研究の射程を見つめ直す試みは、自らの研究を振り返りつつ、また関連する諸研究を視野におさめながら、国際的・学際的に展開すべきだろうと予想していた。

4. 研究成果

本研究の成果として、まずあげるべきは、シュレーヌ田園都市の第1次事業区画にかんして、パリ市内の集合住宅との比較を視野にいたした論考（中野隆生「シュレーヌ田園都市の居住空間と住民にかんする一考察—1926～46年のパリ郊外—」・『年報都市史研究』・第16号・2009年）を公表したことである。そこでは、本研究に流れ込んだ研究の蓄積にもとづきながら、新たな研究の方向性をもさぐっており、上記の「研究の目的」「研究の方法」のなかで提示した①～④の事項のうち、とりわけ②と③にかんする成果になっている。

この論考を前提としながら、設計者アレクサンドル・メトラスの設計図などの文書を渉猟して、ほぼ確実な建設過程を把握することができた。それによれば、第1次事業（1921年の計画）から第8次事業（1949年の計画）まで、8度にわたって計画されたが、第4次事業（1932年の計画）の一部など、予定通り完成せず、のちに改めて計画されたこともあった。ただし、こうした方法で把握された建設過程は、計画段階の書類にもとづいた推計であり、現実に建設された住宅とは異なっている可能性も否定できず、厳密には写真などによる確認が望まれる。しかしながら、本研究の目的からすれば、こうした厳密さは絶対に必要というわけではない。

さて、住棟や住戸についても、建築家の作成した設計図などで確認を進め、第1次事業区画と比較する区画に住棟・住戸の特徴にもとづいて選択し、そこに住む人びとにかんする分析を進めることにした。この方法的決断によって、第4次事業として建設された戸建て住宅30戸余りと高齢者向け施設、および田園都市の中心部と想定される第5次事業区のなかで祭事場（のちの劇場）を取り囲んで立つ集合住宅6棟が、検討の対象として選ばれたが、これら住棟・住戸の設計図は電子データとして入手し、いつでも参照できる状態にある。

選定した住所の住棟・住戸にかんして、住民のデータを、1926・31・36・46年の国勢調査原簿から取り出したが、現在は、それをコンピュータに入力する作業を進めている。したがって、年齢構成や職業など、住民分析の結果を得るには、いまだ少し時間が必要である。

本研究をめぐる方法的省察（つまり④）に関連して、まず、これまでの筆者自身の研究を振り返りつつ、近代フランスにおける居住空間の変遷について整理をおこない、論考にまとめた（中野隆生「フランス近現代における居住空間の変遷」・『学習院史学』・第28号・2010年）。また、住宅の歴史に立ち向かう視座や方法にかんしては、書評のなかで自らの

見解を展開した（中野隆生「書評：北村昌史著『ドイツ住宅改革運動—19世紀の都市化と市民社会—』・『史林』・第92巻第4号・2009年）。さらに、シュレーヌ文書館などで作業を進めるなかで、田園都市とそれを取り巻く社会（シュレーヌ市・パリ地方・フランスなど）が切り結ぶ諸関係をとらえる必要を認識し、その可能性をさぐった。

このほか、フランスの研究者と交流して研究の現状を知るにおよんで、近現代の都市史・住宅史の分野では、ヨーロッパ・レベルでのとらえ方が試みられていることを痛感するにいたった。他方において、建築家との交流が実現し、歴史学の枠組みを超え都市・住宅へ迫る学際的な取り組みの重要性を考えるようになった。これらの反省を踏まえながら、イギリス・フランス・ドイツを専門とする歴史研究者を中心にした共同研究を立ち上げようと決意したが、これも本研究の到達点の一つであり、その延長線上において、国際シンポジウムの実現をはかろうと構想している。

なお、アンリ・セリエの理念や思想にかんしては、史料などの収集・検討は進んだものの、それにもとづく具体的な成果を現時点では提示することが難しく、この点は今後の課題とせざるをえなかった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 中野隆生、フランス近現代における居住空間の変遷、学習院史学、第48号、査読無、2010、113-125
- ② 中野隆生、書評：北村昌史著『ドイツ住宅改革運動—19世紀の都市化と市民社会—』、史林、第92巻第4号、2009、144-149
- ③ 中野隆生、シュレーヌ田園都市の居住空間と住民にかんする一考察—1926～46年のパリ郊外—、年報 都市史研究、第16号、査読有、2009、121-141

〔学会発表〕（計3件）

- ① 中野隆生、パリ郊外の文書館で考えていること、学習院大学人文科学研究所・第21回人文談話会、2009
- ② 中野隆生、山本理顕、木下庸子、鼎談：『1住宅=1家族』システムの限界、JIA建築セミナー2009プロジェクト7、2009
- ③ 中野隆生、近代フランスにおける居住空間の変遷、第25回学習院史学会大会、2009

〔図書〕（計1件）

- ① 中野隆生、山田昌久、川合康、他5名、

桜井書店、歴史のなかの移動とネットワーク、2007

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 隆生 (NAKANO TAKAO)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：90189001